

ここがポイント！授業づくり

京都府丹後教育局
学校教育担当
令和2年11月発行
授業力UP研修6

この資料は、教職経験1～6年目（ステージ1）の先生方を主な対象として作成しています。他のステージの先生方にとっても、御自身の日々の授業実践を振り返っていただくきっかけとなれば幸いです。

今回のテーマ 「対話的な学びの視点からの授業改善」

先生方は授業研究などをするとき、他の先生と話をしたり、本からヒントを得ようとしたりされませんか。それこそが「対話的な学び」で、一人で考えるよりも、考えが深まったり、課題解決に近づいたりしやすいと実感されていることでしょう。そのような「対話的な学び」を児童生徒にもさせるためには、どのようなことに注意したらよいのか考えてみましょう。

【「対話的な学び」の視点】

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考えを手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

話し合い活動の質を向上させるために

話し合い活動を互いの意見を伝え合うことで終わらせないためには、内容や方法の工夫が必要です。



児童生徒にとって必然性のある話し合い活動を設定しましょう。

「一人では解決できそうにないから、友達と相談したい」「自分はこう思うけれど、友達はどう思っているのか知りたい」というように、児童生徒自身が相談したり、交流したりしたいと思うような課題設定ができていますか。児童生徒に課題意識が十分でないままでは、考えが深まるような話し合いにはなりません。例えば、色々な考え方が出そうな課題、一人で解決するのは少し難しそうな課題を設定してみるとよいでしょう。

話し合いのさせ方を工夫しましょう。

意見交流で終わらせないために、思考ツールを使うのも一つの方法です。思考ツールを使うことによって、「分類する」「比較する」など考える技法を身に付けることができ、考えたことが可視化できます。ツールを使うことで、すべての児童生徒が話し合いに参加しやすくなります。

「対話的な学び」をするためには、「みんなと違う意見を言っても大丈夫」「どんな意見でも聞いてもらえる、受け止めてもらえる」そのような関係が必要です。生徒指導の三機能を生かした授業づくりにより「対話的な学び」が成立する学級をつくるのが大切です。

詳しくは「ここがポイント！授業づくり第3号～授業づくりと学級づくり～」を参照してください。



「対話的な学び＝話し合い活動」というわけではありません。書籍等から先哲の考えを知り、自分の考えを広げることも「対話的な学び」の一つです。今回の資料では、「話し合い活動の充実」に焦点を当てています。

自己の考えを広げ深めるために

「自己の考えを広げ深める」という目的を、先生も児童生徒も理解した上で「対話的な学び」をすることが大切です。



自分の考えを広げ深めることを価値付けましょう。

自分なりの考えをもったことで満足するのではなく、他者の意見を取り入れて自分の考えをよりよくすることがよいことであるということを見事に理解させる必要があります。これは「主体的に学習に取り組む態度」の「自らの学習を調整しようとする側面」とも関わってきます。

自分の考えを広げ深める時間を確保しましょう。

話し合い活動をした後に、児童生徒は自分の考えを見直したり、変えたりしているのでしょうか。意見交流をしてすぐに全体での発表という展開では、児童生徒が自分の考えを振り返り考え直す時間がありません。児童生徒が話し合う時間と、考えをまとめ直す時間を確保する必要があります。